

学園戦姫

ともえ

淫辱の卍刺上

小説 斐芝嘉和
挿絵 サブロー

立ち読み版



プロローグ	知恵を授けるは主	006
第一章	特務代官、推参	011
第二章	予兆	028
第三章	野に伏せし獣	054
第四章	相剋	073
第五章	目覚めし者は……	096
第六章	姦計	124
第七章	抑圧の報酬	161
第八章	淫獣	206
エピローグ	産めよ増やせよ地に満ちよ	254

登場人物紹介

Characters



たちばな み ゆき
立花美雪

巴が特務代官として赴いた那珂崎学園に通う女学生。那珂崎の大商人の娘で、侍の巴に憧れを抱いている。活発な見た目ながら、料理が得意で、男子学生に人気がある。

しんりゅう じ こうけん
神龍寺弘賢

那珂家に仕え、政治面でサポートをする臣族・神龍寺家の青年。那珂崎学園の生徒会長を務めている。



な か ともえ
那珂巴

チャクラを開き、超常の力を操る侍族の娘。統治者としての威厳を保つため厳しい態度を取るが、庇護を求める者には手を差し伸べる優しさも持つ。魔物を一刀のもとに切り伏せる実力の持ち主。

第五章 目覚めし者は……

神龍寺、もしくはそれに連なる者の中に破天連教徒が潜んでいるかもしれないという推測は、巴にとって重い足枷となった。那珂家と神龍寺家はほぼ同じと見なされるくらい緊密な関係にあるからだ。

「巴様が神龍寺家に疑いを持っていると知られたら、公平性を担保するためなどと理屈をつけて、九州鎮台が出張ってくるかもしれない」

「かもしれない、ではないぞ。確実に出張ってくるであろう。最悪、神龍寺が築いてくれたこの学園都市を、幕府に取り上げられてしまうかもしれない……」

それ以上に、巴としては神龍寺を疑うのは心苦しい。目の前にいる坊主頭の青年もそうだが、神龍寺家の面々が那珂家に捧げる忠誠はとてつもなく篤いのだ。それに応えることが那珂に生まれた者の使命だと幼いころから教えられてきたから、神龍寺を疑うことは身を切るように辛い。

「しかし、このまま放っておくわけにもいかぬし……」

「ですから、このことはいましばらく、巴様おひとりの胸中に留め置きください。私が探りを入れてみます。また、もし巴様の推論が当たっていた場合でも、神龍寺家の内々で済ませてしまうのが最良かと……」

「無理じゃ。破天連教徒が頻出して居るのは周知の事実、内々では済むまい」

「いえ、済みます。済ませたあとで、別の事実を作ればよいのです」

「別の……とは？」

「それは、巴様が知らなくてもよいこと……いえ、知ってはならぬことです。万が一事が露見した場合の用心として、始末が一段落するまで、那珂様には目も耳も閉じていただかなければなりません」

「そうはいかぬ。那珂と神龍寺は一蓮托生、そちたちだけに責めを負わすわけには……」

「ゆえにこそ、です。我々がヘマをしたとき、主である那珂様が御無事でなければ、助けただけませんか」

生真面目な青年が慣れない冗談を口にしたのは、それほどまでに微妙な状況にあるという証。巴も分かっているから、それ以上は止められなかった。

(……ダメじゃな。チャクラだ侍だと気張っていても、肝心なところで役に立たぬ。こうなると、そなたを侍にするという約束も、なにやら粗忽そごなことであつたような気がしてくるぞ……のう、美雪)

中央学園研究部付属病院、地下病室——神龍寺と別れた巴は自責の念に苛まれながら、いまだに目を覚まさない立花美雪を見舞っていた。

巴より頭ひとつ分背が低いボーイッシュな美少女は、簡素なパイプベッドに横たわっているとさらに小柄に見える。

滑らかな額をさりげなく隠す軽やかな前髪。

長い睫、薄い瞼、薔薇の蕾のような唇

薄青色のガウンを纏った控え目な胸が、静かな呼吸に合わせてゆっくり上下している。手や足の爪も薄紅色に輝いていて——それだけ見れば、実に健やかな寝姿だ。

診察した医師も言っていたが、外傷はない。体温、脈拍、血圧、血中酸素濃度、呼吸成分、脳電位等々、科学的に調べられる生体データにも異常はない。

だが、そのうちに目を覚ますはず、という医師の見立ては間違っている。魔物によって強引にこじ開けられてしまった美雪のチャクラから、腐臭に似たおぞましい気が立ち上っているのだ。

（そなたの経絡に、魔物の残留思念が喰い込んでおる……済まぬ。開きかけたチャクラをそのままにしておいた、妾のミスじゃ）

極めて珍しいケースだが、ないことではない。古くは高山左近、明智珠、天草時貞、近世では内村鑑造などなど——ゆえに、対処法も編み出されている。

「……そなたを救うためじゃ、赦せ」

囁き声で詫びた巴は、美雪のガウンに手を伸ばし——前身頃ははだけて、白い柔肌を露わにした。蛍光灯の冷ややかな光を浴びて、小振りな乳房がしつとりと輝く。その尖端を飾る可憐な乳首はほんのり薄紅色に色づいて——まるで桜の蕾のよう。

贅肉の薄い、ほどよく引き締まった腹。

縦長の可愛らしいヘソ、赤ん坊のようにツルンとした恥丘、艶めかしさより若々しさが勝っているスマートな太腿——少女から大人へと変わりつつある、未成熟な裸体。

傷ひとつなく、瑞々しくて伸びやかで——女性としての艶めかしさはまだ不足しているが、それだけに健やかさが際立っている。こうして眠っていても、身の内側から無垢な若さが滲み出ているようだ。

そんな、清らかな少女の胎内に——魔物の気配が染みついている。開いただけで回転していないチャクラは、魔物が棲みつくのに最適な器官なのだ。

ただし、実体は棲みついていないままなら、まだ救える。

「救せ、美雪……」

再び謝った巴は、切れ長の瞳を細め、無垢な寝顔に頬を寄せ——健やかな寝息を繰り返している柔らかな唇に、己の唇をソツと重ねた。

「ン……？ ふ……」

眠ったままの美少女が、薄い臉を震わせて微かに反応を示す。

だが、起きない。チャクラに染みついた魔物の残留思念によって経絡が歪められ、気の流れが阻害されている。

艶やかな黒髪を細い肩から滑り落とした巴は、触れ合う唇を意識しながら手を滑らせ、あどけない乳房に触れた。プニツとした乳首を越え、乳麓へ降りてヘソを辿り——無毛の恥丘からマシユマロのような肉畝へと、白い指を伸ばしていく。

淫ら心に唆そそのかされての痴行ではない。

チャクラに清浄な氣を流し込んで穢れた氣を祓う——それが、魔物の残留思念を追い出す正式な対処方法なのだ。

（本来ならば侍の医師、あるいは許嫁など、しかるべき者にだけ許されている方法じゃが……済まぬ、美雪。事が一段落するまで、そなたを外へは出せぬゆえ……）

謝罪の氣持ちを乗せた唇が、昏々と眠る美雪の唇にぬめつと密着する。鼻をくすぐる微かな吐息、唇を介して伝わってくるほんのり温かな美雪の体温。

——ふちゆ、にゆち……。

静かに繰り返されている呼吸や規則正しい胸の鼓動に氣を配りながら、巴は舌を尖らせ、美少女の口腔へそろそろと挿し込んだ。同時に、幼気な恥丘を隠すように被せた掌の先、プニプニとした柔肉を搔き分けて、しなやかな指が乙女の秘処へ。

微かに潤んだ小さな小さな淫唇に、慎重に触れる。

指の先、舌の先に感じる温かな粘膜に、同時にソツと氣を流し込む。

「ン……」

上半身だけ覆い被さった制服姿の巴の下で、青林檎のように瑞々しい裸の美少女が微かに身じろぎした。長い睫が震え、閉じた瞼の下で瞳が揺れる。

「ふ、あ……」

吐息を漏らす唇から離れないよう、巴は首を捻り、さらに唇を押しつけた。潤んだ粘膜

が擦れ合い、温かな湿り気が「ぬちゅ」と微かな音を立てる。口舌を挿し込み、ツルツルとした小さな歯を舐め、美雪の唾液を啜り――。

唇や舌からも気を送り込むが、メインはやはり指先だ。秘裂へ這い込んだ指先は乙女の花芯を傷つけぬように注意しながら、肉厚のレンゲに似た可憐な花卉をまさぐる。縁を辿り、孔の周囲をしごき、

(南無八幡！ 目覚めてくれ、美雪……)

侍の守り神に祈りつつ、チャクラを開いて気を送り込む。

ほどなくして――。

「ンあ？ ふ……あ……」

口と秘裂からじわりじわりと流れ込む清浄な気に、美雪がようやく感応し始めた。

制服に包まれた巴の豊満な乳房の下で、桃色に輝く可憐な乳首がプクツと勃つ。透き通るように白かった柔肌に血色が戻り、鼻に感じる美少女の吐息が微かに甘味を帯び、上擦つて――性的な反応に似ているが、これでいい。経絡を刺戟してチャクラへと響くそれは、肉体的な快感とほぼ同じなのだ。

芭羅門教の教義では、性は決して不浄ではない。

性は生に通じるし、同時に氣力を意味する精でもあり、清や正、聖にも成り得る。その点で、性(Ⅱ聖)を辱して邪に墮しめる破天連教とは根本的に違う。

(魔物よ、去れ……無垢なる娘子の清らかな身から、疾く去れ！)

美雪のあどけない割れ目を白い細指でまさぐりながら、鍊りに鍊った気をゆっくり、ゆっくり、慎重に注ぎ込んでいくと――。

「くう……ンッ！ あ……あ？」

眠れる少女の長い睫が震え、薄い瞼が微かに開いた。

夢の中を彷徨さまよっているようにぼんやりとした、精神のない眼差し。魔物によって強制された不自然な眠りから覚めたばかりだから、間近にある巴の顔をすぐには認識できない。

その前に――と、巴は裸の美少女の控え目な胸に、己の形良い巨乳を乗せた。

「……ン？ あ……ンっ!!」

ハッとして声を上げようとした美雪の口を塞ぐように、さらに唇を押しつける。

ちゅ――ちゅじゅっ！

甘酸っぱい唾液を啜り、芳かよしい吐息を吸い込む。

「む、むう……ふはっ?! と、巴、さま……?」

円らな瞳を白黒させた美少女が、懸命に首を捻って執拗な接吻から逃れた。

悲鳴を上げられても仕方ない、と覚悟した巴だったが――。

「夢……じゃない……うふふ……巴様、嬉しゅうございます」

照れたように微笑んだ美雪はフツと瞼を閉じ、細い顎を上げる。

自ら唇を尖らせ、息を詰め、裸の胸を高鳴らせて――まるで続きをねだっているような、甘える仔犬のような表情。

寝惚けているのだろうか？ そうでなければこんなこと——女に口を吸われ、秘処を弄られるなど、すぐに受け入れられるはずがない。

それにしてもこの——なんとという愛らしい姿。

殺気以外には疎い巴だが、美雪が己のすべてを投げ出し、命まで委ねようとしているのは分かる。その、あまりにも健気な姿に、巴の胸も高鳴ってしまった。身体の芯が燃えるように熱くなり、思わずギュッと抱き締めそうになる。

(い、いかぬ……これは治療じゃ。美雪は妾を信頼しているからこそ、このように無防備なのじゃ。その想いに応えるには、治療に専念しなければ……)

動揺を押し隠し、次の段階へ移る。

ベッドに乗り上がり、ほっそりとした裸体に覆い被さって——改めてキスし直し、むちゅ、ちゅぱ、と触れ合う唇を鳴らしながら、両手を美雪の胸へ。

「ンあ？ あ……」

控え目な乳房に軽く指を沈めただけで、小柄な美少女のあどけない頬がたちまちパアツと赤らんだ。羞恥もあるだろうが、それ以上に、巴の指先から放たれている清浄な気が、まだ膨らみきっていない乳房に快感を与えているのだ。

「と、巴、さまあ……」

「痛むか？」

「いえ、違……あ、ンふ……!!」

ショートカットの黒髪を枕に乱し、小柄な少女がピクン、ピクン、と白い裸体を振る。芯に硬さの残る未成熟な双球を優しく撫で捏ね、慎重に揉み込むと――。

「ふあ……ンあ、あうっ！」

期待に強張っていた幼気な頬が、悦びに蕩けた。ただでさえ上擦っていた呼吸がさらに乱れ、甘味を帯びて、巴の手の下であどけない乳房が深く大きく波打ち始める。

「はあ、はあ……巴様、巴様あ……」

徐々に我を忘れ、憧れの侍との恍惚に溺れていく美雪。

だが、巴の顔色は冴えない。

（ここが一番、魔物の気配が濃い……乳腺に染みついているのじゃな）

指先から気を送り込むだけでは除けそうにない。

吸い出すしかない、か――。

そう判断した巴はキスを中断し、身体を少し下げた。喘ぐ美雪の吐息を額に受け、さらに下がって――。プクッと実った可憐な乳首に、柔らかな唇を押しつける。

「くふっ!? あ、あ……」

弾ける快感にビクッと首を竦め、反射的に巴の頭を押さえる美雪。

巴は構わず、コリコリした肉豆に舌を添わす。

開いた唇で乳暈に吸いつきながら、乳頭を穿るように舐め、せせる。

「巴、さまあ！」



「な、な……あうっ!! あ、あ……う、ああっ!!」

グリ、グリ、グリ——軽く捻られた淫具が押し込まれ、硬くて小さな珠がひとつ、またひとつと尻穴の奥へ。淫具など知るはずもない処女直腸が、初めて覚えたゴムの感触にぎこちなく波打ち、羞じらう意識を無視した便意が勝手に高まってしまふ。

(なんじゃ、これは……なんなのじゃ、これはっ!!)

おぞましい違和感が排泄器官に居座って、腰の辺りがもどかしい。

細身の淫具にこじ開けられた可憐な尻穴はヒクン、ヒクン、と蠢いているが、棒状に連ねられた珠と珠がカエシになっているのか、どんなに息んでもまったくヒリ出せない。

「ほ、解すとは、どういうことじゃっ!! い、一般生徒と妾の尻に、ど、どんな関係があるというのじゃっ!!」

穢らわしい肉穴におぞましい淫具を挿し込まれたせいで、巴の頬に羞恥の血が上った。顔が熱い。耳の先まで真っ赤になる。

しきりに首を捻り、背後にいるはずの神龍寺を探すのだが——。

「カマトトぶらないでくださいよ、お侍様。分かっている癖にい」

巴の問いに応えたのは、指で抓んだプラスチック製の楕円球をウンウンと震わせ始めた、ほかの男たち。

「女の穴ってのは、どれも男のためにあるんです」

「こっちの穴と同じように、オチンチンを入れるんですよ」

「ふはっ!? あ、あうっ!? ああやめよ、やめよやめよ、やめよおおっ!」

小刻みに震える硬い珠が、ひとつ、ふたつ、みつつ——片脚を吊り上げられて閉じられない股間に、強く強く押し当てられた。

柔らかな肉畝や感じやすい粘膜花弁はショーツに護られているが、機械仕掛けの激震は布地を伝い、当てられていない場所にまで響く。

「くう、うう……うううっ!」

下着を濡らすほど心地よくなっていた淫唇が、細かな振動を受けて甘く痺れる。

(か、感じてはならぬ、感じてしまったら、侍でなく、なる……ううっ!)

歯を喰い縛り眉根を寄せ、吊られた身体をしきりに振って耐えようとする巴。

だが、男たちに容赦はない。

割れ目の端、ほっそりとした莢にもひとつ——そしてもっとも敏感な肉豆にもひとつ。

「きひうっ!? あう、あ……ンいいいっ!」

密かに勃起していたクリトリスが震えるプラスチック球に上下から挟まれ、稲光のような快感が次々と炸裂した。細い背筋を熱い津波が駆け抜けて、両腕と片脚を吊られた身体が激しく跳ね、鋭く反り返る。

「気、気が……乱れるうっ! おかしくな、るううっ!」

「大丈夫ですよ、巴様。イかない限りは平気です」

「侍でいたければ我慢してください。どんなに気持ちよくても、イッてはダメですよ」

「あっ!? あ、ああっ!? 尻、尻……尻まで……ああッ!」

排泄器官を占拠したゴム珠の連なりが、秘裂に当てられている淫具に負けじと力強く震え始めた。掻き回された直腸に熱い感覚が膨れ上がり、男たちに抱えられた腰が躍る。ヘソの下までジワリジワリと熱くなるのは、繊細な粘膜隔壁を伝った振動が子宮を揺さぶり、処女膣穴を揉みまくるせいだ。

「へ、変じゃ……変に、なるうっ! 妾の尻が、尻が……変に、なるうっ!」

「別におかしくありませんよ、巴様。破天連教によれば、チャクラと尻穴は関係が深いのだそうです。チャクラが開く体質なら、必ず尻穴で気持ちよくなれるそうです」

「う……嘘じゃっ! 嘘じゃ、嘘に決まって……あッ!? う、ぬううっ!」

尻穴に深々と挿し込まれている淫具が、軽く捻られ、わずかに引かれた。小さな珠がふたつみつ、ヌポヌポと抜け出して——捲り返された肛門が甘やかに痺れる。新たに生じた肛悦は会陰部を伝い、薄布越しにいくつものローターを押しつけられて歪んだ肉畝や淫唇まで感度を増して、鮮烈な感覚が閃く。

（た、耐えなければ……侍でいられなくなる……き、気が乱れて……チャクラが、プラナが……わ、妾の修行が、無に……帰ってしまうッ!）

歯を喰い縛って耐えようとするのに、

「ンあっ!? あ、ううっ!」

クリトリスを挟んだふたつのローターが微妙に角度を変えると、脳天を突き抜けていく



激感に全身の力が抜けた。

太い腕の中で伸びやかな太腿がピンと突っ張り、びくん、びくん、と震えてしまう。

(か、感じる……痺れる、蕩ける……ピンピン、すッるうううっ！)

いくつものプラスチック球を押し当てられた割れ目がどうしようもなく気持ちよく、理性が蕩け、押し流されていく。侍でなくなる恐怖はいっししか薄れ、

「ふあ……くそ……おのれえ……ッ！」

自分がなにに対して怒っているのか、なぜこの快感に抗っているのかすらも、だんだん分からなくなってきた。

——ヴヴヴウウン——ヴヴ、ヴヴヴヴン……。

粘膜花弁やクリトリスを責め立てる心地よい激震は、尻穴側からグチュグチュと揉みまくられている腔にも響く。男根を知らぬはずの処女腔襞が女体に備わった牝の本能に唆されてそわそわと立ち上がり、細かな溝のひとつひとつに淫らかな蜜が滲む。

「はう、あ……ぬ、ううう……ッ！」

喰い縛っているはずの奥歯が、心地よすぎる振動に弛む。

絶え間なく閃く快感に、羞じらう意識が切り刻まれていく。

細い喉を反らせ、上擦る吐息を「ああ、ああ！」と漏らすたび、ゴム珠に掻き回された直腸が解れ、尻穴が弛んでいく。

「お、のれ……ゆ、赦さぬ、赦さぬぞおっ！」

凄む声を振り絞ったつもりだったのに、甘えるような響きが混じり、いやらしい男たちを余計に悦ばせてしまった。

「赦してください、お侍様あ。もつともつと気持ちよくしてあげますから」

「ひあつ!? ああやめよ、よせ……よせと言うにいつ！」

当てられているローターが、歪む肉畝に沿って上下に動く。

秘部に伝わる激震が微妙に強さと角度を変え、

「うう、ああ、ううう……ッ！」

いままで感じていなかった場所まで隈なく責め立てられてしまう。

(あ、熱い……濡れる、濡れてしまう……ッ！)

四方八方からローターを押し当てられた秘裂には、柑橘系のジャムに似た香りを放つ愛蜜がじゅわ、じゅわ、と滲んでいた。シヨーツの股布はもちろん、黒くて薄いナイロンストッキングにまで染み広がって——震えるプラスチック球に歪められた肉畝がヌチュクチュと小さな水音を立てる。

「も、もういいっ！ もうたくさんじゃっ！ これ以上は、もう……もう……ふあつ!?

ああそんな……胸は、胸までは……よせええっ！」

ゆさゆさタバタブと弾む豊満な乳房にも、上下左右からいくつものローターが押し当てられた。いくつもの硬い珠が柔らかな乳肉を押し歪め、あらゆる方向に引っ張られたブラジャーがずれ落ちて肉果を露出させる。

「よせ、じゃないでしょう？ 人にものを頼むときはそれなりの言葉遣いでないと」

「あうっ!? あう、あ、あううっ！」

「巴様はまだ侍でいるおつもりでしょうが、もうすぐイッてしまいそうだし」

「器具でイッたら、もう侍じゃない。侍じゃないのに偉そうな言葉遣いは、変でしょ？」

「さ……侍じゃっ！ わ、妾はまだ、さ、侍……あッ!? あ、あああううっ！」

ツンと立ち上がった勃起乳首の側面に、上下左右からいくつもの電動淫具が押しつけられた。複数の振動がローターの丸い先端に押し潰されていく乳首だけでなく、火照って張りを増した美乳全体にピンピンと響きまくる。

「れえあああ、あひ、ひ……くひいっ！」

乳房と秘裂の間を何度も何度も往復する、肉悦の波。

腕と脚を吊る鎖を軋ませて、折れんばかりに捻れる背筋。

長く艶やかなポニーテールが激しく揺れ、芳しい牝香を振り撒く。

仰向いた頬は恍惚に赤らみ、熱っぽく潤んだ瞳から法悦の涙がこぼれ――。

「や、や……やめよ、弘賢ッ！ 本当に、これ以上は、もう、もう……もうおおっ！ も

う赦せ、頼むッ！ 言葉遣いも改めるゆえ……赦せ、赦せえっ！」

「いまさらそんなこと言われましても、ねえ」

「我々は、侍である巴様が好きなのです」

ニヤつく男たちが手を伸ばし、喘ぎ悶える美少女のあちこちにヴンヴン震える玩具を這



いまくらせた。跳ね躍る乳房を、硬く痼った乳首を、汗ばむうなじを、愛液に潤んだ秘裂を——無数のローターが押し歪め、甘やかな振動で責め立てる。

「だから耐えてください、巴様。絶対にイッてはダメですよ。イッたら気が乱れて、侍に戻れなくなりそうですからね」

「ううっ?! ああ、そんな、そんな……ああダメ、いやじゃ……ダメダメ、ダメなのじゃ、もうダメ、ダメダメ、ダメえええっ! イきたくない、イきたくないのに……あ、ああ、ああ、あああああ——ッ!」

びくんっ! びくんっ!

——ぶっしやあああっ!

バネ仕掛けのように反り返り、生まれて初めての失禁絶頂を体験してしまう巴。

(あ、ああ、ああ……漏れて、いる……オシッコ……漏れて、るう……)

薄布を伝って股間に広がる生温かな感触がおかしくなるほど恥ずかしいのに、仰向いた頬には弛緩した微笑みが浮く。

恥辱に強張っていた手足から力が抜け、侍の矜持に張り詰めていた心が絶頂の余韻に為す術もなく蕩け——。

「ふ、は……ああ……」

恍惚の吐息を最後に、意識がフツと遠退いた。

(し、尻が……尻穴が……あ、熱い……ジンジン、するう……)

太くて硬い肉棒をねじ込まれた排泄孔に、すべての意識が吸い寄せられている。

悔しい、恥ずかしい——なのにどうしようもなく気持ちイイ。

仰向いて赤らんだ頬は肛悦に弛み、涼やかな瞳は淫熱に潤み——喘ぐ唇が紅くぼつてりとして、肉感が増す。髪の毛の生え際や耳の裏などに牝香を含んだ汗が噴き出し、巴の周囲に漂う甘酸っぱい芳香がグツと濃くなる。

(蕩ける、痺れる……感じて、しまう……尻、なのに……尻、なの……にいい！)

穢らしい肉穴を犯されているのだから、もつと羞じらうべきだ、羞じらわないのはおかしい——頭では思っているのに、羞じらうだけの余裕がない。

「ふあ、あ……ンう……」

排泄器官を埋め尽くし、薄い粘膜隔壁越しに処女腔穴を押し潰して、ズクン、ズクンと拍動している熱くて太い肉棒——それ以外はもう、まったく意識できない。

「なんだ？ 急に大人しくなっちゃったな。もつともつと、普段偉そうにしている侍がヒイヒイ泣き喚く姿を楽しみたかったのに……」

「まあ待て。鳴かぬなら、鳴かせてやろうなんとやら、だ」

美少女侍の尻穴を犯した少年が浮つく声を抑え、ニンマリと笑った。裸の乳房まで引き寄せられている巴の膝裏に手を当て——根元までねじ込んだペニスを、ゆつくりと退ける。

「ンあ……ッ!? あ、ああっ!!」

ぬぬ、ぬぬ、と抜け出ていく淫棒に尻穴を捲り返され、新たな肛悦が炸裂した。台の上、撓められた背を弾けるように反り返らせて、

「ンひっ!! ンあ、あ、熱いいっ!」

震える声を迸らせる巴。

「そうら、イイ声が出たぞ!」

「つていうか、コイツ本当にケツの穴で感じるんだな」

「肛門でこれだけよがりまくるつてことは……」

苦笑した少年たちがギラギラ光る瞳で見下ろすのは、粘着テープであられもなく割り開かれた美少女侍の秘裂。

尻穴を犯された余波で絞り出されていた愛液が、腔洞に余裕ができたらしく、じゆるじゆると吸い込まれていく。だが、カリ首まで引き抜かれた淫棒がベクトルを転じ、奥へ奥へと押し戻されると、再び泡立ちながらブジュブジュ噴き出してくる。

「ンあ、ンあ、あああつ! よせ……や、やめ……よおっ! 尻が、尻が……蕩けて、しま、ああ……ああ、ああ、ああああつ!」

徐々に速まる突き込みに、巴の声が波打ち始めた。

仰向いた秘裂には愛液の泡が溢れ、肛悦の余波を受けたクリトリスがますます硬く勃起して——紅く染められたもち米のように、プクツと膨れて艶やかに輝く。

「つたくしかたねえな! ダラダラ涎を垂らしやがって、いやらしい腔穴だ!」

小柄な少年が言い訳がましく言つて、巴が乗せられている台によじ登った。

「ふあ!? あ、あ……き、貴様、なにを……」

「決まつてるだろ? 姫さんの締まりのない淫穴に、俺のチンポで栓をするのさ!」
言うが早いか、仰向いた巴の腰を跨ぎ――。

「よ、よせ、やめよ……やめ、やめ……ああつ!」

太さよりも長さが目立つ少年のペニスが、蜜まみれの秘裂に押し当てられた。

繊細な粘膜花弁に感じる、牡肉の熱さ。

(なぜじゃっ!? なぜ、なぜこんな……わ、妾の身体が、悦んでしま、ううっ!)

たくましい男根を予感した処女腔洞がフライング気味に蠕動し、肛悦とは微妙に異なる快感が下腹に膨れ上がった。

欲しい、欲しい、欲しい――子宮が欲情し、新たな蜜が滾々と湧く。

昂る女体に応えるように、美少女侍に覆い被さった少年がゆっくり腰を落とし――。

グチ、グチ――グブチュツ!

「ンあつ!? あぎ、あぎ……あぎいいつ!」

硬くゴツゴツとした淫棒に純潔の証を突き破られ、激痛に反り返る巴。

だが、頭の中が真っ白になるほどの痛みは一瞬で消え、代わりに同じ強さの、めくるめく快感が秘裂に爆発。

美少女侍の身体を支配した魔物が、脳へ至る信号を途中ですり替えているのだ。

「ひあつ、あう……あ？ あ……あえああつ!!」

破瓜の血を纏った男根が奥へ奥へ突き進むにつれて、巴は肉の悦びに喘ぎ悶えた。

(な、なぜじゃつ!!) 初めて、なのに……いやなのに、怖いのに、汚いのに……なぜこんなに……か、感じて……しまうのじゃつ!!)

作法に則って行う自慰とは、まるで違う。身体の本を、熱い突風が吹き抜けていくような——煮え立った波が、背を這い登って頭の中へ流れ込んでくるような——。

生まれて初めて牡肉に触れるヒダヒダが、雄々しく張り出したエラに掻き分けられ、押し潰される。ただでさえ狭い処女膣洞が、尻穴を犯している太いペニスによってさらに狭められていて、

「えめあつ!! えあ、えあああつ!!」

膣壁のひとつひとつにプチプチと弾けまくる、鮮烈な感覚。

(ダメ、ダメ……ダメじゃつ!) こんなのはよくない、こんなのはいけない……さ、侍が、民に犯されて、尻にも膣にも、男根をねじ込まれて……こ、こんなに……こんなに気持ちよくなつては、ダメ……じゃああつ!)

羞じらう心とはうらはらに、仰向いた巴の頬には淫らな微笑みが浮いていた。

焦点を失ってユラユラと揺れる、熱っぽく潤んだ瞳。

閉じることを忘れて喘ぐ唇、その端からトロリトロリと垂れ落ちる涎。

「く、ううつ!! こ、これがお待様のオマンコかあつ! すっげえ締めつけ! チンポが

喰いちぎられそうだ！」

嬉しそうに叫んだ少年が腰を振り、鋼のように硬い淫棒で膣穴を突く。

異なるリズムで抽送される二本のペニスの間で繊細な粘膜隔壁がグッチュグッチュと磨り潰され、淫穴と排泄器官の両方に痺れるような快感が刻み込まれた。

「やう、あえ、あにえあああつ！」

次々と炸裂する淫悦に巴の意識が切り刻まれ、迸る声が揺らぐ。

自分がどんな格好をしているのか、だれにどの穴をどのように犯されているのかも、だんだん分からなくなってきた——と。

「侍の癖に変な声で鳴くな。みつともねえ！」

「あつ!? あ、あえあ……！」

サラサラと揺れていたポニーテールを掴まれ、力任せに引き下げられた。

細い喉が伸び、恍惚に蕩けた顔が逆さになる。

「テメエみたいな淫乱侍は、日之本国の恥だ！ これでも啞えて反省しろ！」

「ンおつ!? お、おふ……ッ!?」

喘ぐ口に太い肉棒が押し当てられ、一気に喉奥までグププツとねじ込まれた。

ペニスに触れた舌にジワツと、甘い牡エキスが広がる。

(き、汚いッ！ 臭い……け、穢らわ、しい……)

頭では思うのに、怒りはまったく湧かなかつた。経絡に棲みついた魔物のせいで、口ま

で淫穴にされてしまったらしい。太くて熱い亀頭に喉奥をグッポグッポと抉られても、閃く息苦しさをすら快感にすり替わってしまう。

「む、ンぷ……えぶお、ンむお……ンあつ!! あ、ああつ!」

尻穴、膣、口唇——たくましい男根に抉られているみつつの肉穴とは別に、胸にも熱い感覚が膨れ上がった。左右から擦りつけられたペニスが火照る乳肉を押し歪め、赤々と色づいている乳首に向けてムギユ、ムギユ、と絞り上げる動き。

「ンお、おふい、おふいんふい……ンンうっ!」

淫棒を咥え込んだ口から涎混じりの声をこぼすと、逆さになった頬にも黒光りする淫茎が擦りつけられた。額にも、脛にも——うなじにも、耳の穴にも——尖端に先走り汁を膨らませた亀頭が、狂ったように押しつけられる。

（お、おちんちんが、いっぱい……中も、外も……おちんちん、おちんちんっ!）

熱い牡肉に揉み込まれた柔肌が、産みつけられる悦びに為す術もなく蕩けていく。

グチュングチュンと抉られた膣や尻穴や喉奥が、痺れるほどに気持ちいい。

「えお、うぷ……ンえああつ! イイ、イイ……イイいっ!」

口腔を埋め尽くしていた男根を吐き出し、甘やかに響く声で思わず叫ぶ巴。

己の唾液に濡れた淫棒が顔の上を転げ回り、細い顎も柔らかな頬も生臭い粘液でねちよねちよになるが、気持ち悪いとは思わなかった。

むしろ——。

「オチンチン、イイツ！ オチンチン、オチンチンううっ！」

甘い牡エキスを感じられなくなった舌が、物足りなさを覚えて勝手に伸びる。熱くたくましい弾力を求めて、喘ぐ唇がゴツゴツした淫茎を追う。吸いつく。

（こ、こんなもの、美味しいはずがない……のに……このコク、この舌触り……岩牡蠣いわがきにも似た甘辛さ……春菊、いやドクダミのような青臭さ……き、嫌いでは、ない……）

亀頭に滲む粘液は滋味に溢れ、淡い精臭を嗅ぐと唾液が湧く。

鈴口に膨れる透明な珠をチュチュッと啜ると、舌を押し潰す男根のずっしりとした存在感がたまらないほど懐かしくなり――。

「ンちゅっ！ ンちゅ……ンあつも！」

自ら口を開き、パツクリ啜え込んでしまった。

唇を締め、平らに広げた舌を肉棹に寄り添わせると、

（ああ、これじゃ！ これでこそ、じゃ……！）

あるべき場所にあるべきものが収まったような安心感が胸の底から込み上げてきた。

「うは、コイツ自分から啜え直しやがったぞ！」

美少女の口にペニスを吸い込まれた少年が悦び、腰を激しく突き込み始めた。

逆さになった巴の鼻や脛を、ビタン！ ビタン！ と打つ陰囊。

「ンぷっ!! ンえお、おぷっ！」

むくれた亀頭に食道粘膜を愛撫され、喉の奥にめくるめく快感を産みつけられる。息苦

しさが閃きたび、臉の裏に悦びの稲光が弾け、逆さになった顔に法悦の涙をこぼす巴。

グッポグッポと尻穴を抉る男根も、ちゅぼっ！ちゅぼっ！と腔洞を掻き回す淫棒も、競うように激しさを増す。

「ま、待ふえ……も、もっふお、ゆっふり……ンおっ!?ンむ、む、むうっ！」

額に擦りつけられている裏筋がますます硬く熱くなり、美乳を押し歪める亀頭の群れはさらに硬く怒張し、さらに紅く輝いて——頬にもうなじにも、耳の穴にも生温かな先走り汁が塗り広げられ——。

「むう、む……ンえあああつ！ああ、ああ、あああつ！」

気持ちよすぎて、なにがなんだかよく分からない。

意識が遠退きそうなほど気持ちイイが、同時になぜか切ないような気もする。

「おちんちん、おちんちん……もつとおっ！」

美味しいペニスを自ら吐き出したことも忘れ、邪具に吊られた手や足をビクンビクンと跳ねさせて、駄々っ子のようにおねだりする。

「秘処に、尻に……お、オチンチンをおおっ！」

「まだ澄ましてやがるな、バカ侍。いいか、この穴はオマンコ、ケツの穴は尻マンコだ。分かったら、ちゃんと言い直せ！」

「お、お……オマンコおおっ！尻マンコ、尻マンコ、尻マンコおおっ！」

少年たちに命ぜられるまま卑猥な言葉を口走った途端、頭の芯まで痺れてしまった。

肉悦の荒波に乗じた魔物の根が、ついに脳髓にまで達したのだ。

「えにあっ!? えあ、あ……にえひいっ!?」

雄々しく張り出したエラにグチュングチュンと磨り潰されている膣壁の悦びが、頭の中にダイレクトに響く。直腸の中で鋼のように強張った巨根が動くたび、理性や意識が削り取られ、純白の快感が爆発する。

「イイ、イイ……オマンコ、イイッ! 尻マンコもイイ、イイ、イイイッ! からもつと、もつともつと、オチンチンをお……ッ!」

台の上に仰向けに寝かされたスマートな女体が、膣と尻穴を抉られるたびバネ仕掛けのように反り返り、いやらしくくねる。犯された双穴はギユポ、ギユポ、と卑猥な音とともに甘酸っぱく香る粘液を垂らし——逆さになった頭から垂れる長く艶やかなポニーテールがファサファサ、ユサユサ、と悦びを表現するように激しく揺れる。

「オマンコと尻マンコだけか? おっぱいはどうだ? 顔も気持ちいいんじゃないか?」
嘲る少年たちが動きを強め、よがり狂う美少女侍に滾る男根を強く強く擦りつけた。

ムギユツムギユツと揉み歪められる乳房。

逆さになった顔中に涎と先走り汁を塗りたくる亀頭の群れ。

「い、イイイッ! おっぱいマンコ、顔……マンコおおっ! じえんぶ、じえんぶ、おまんこおっ! じえんぶじえんぶ、イイイッ!」

叫べば叫ぶほど気持ちよくなる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

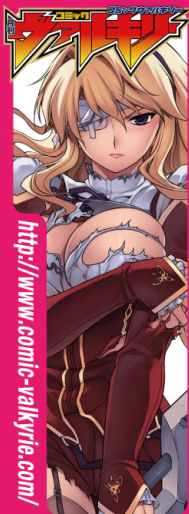
フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

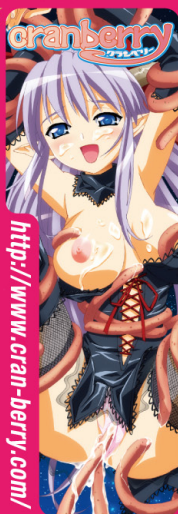
サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!